

取付きが分からずビバーク、のち自分の落石でロープ切断

OWCC 中川和道 20230316

間抜けな経験をたくさんしてきた。前に続いて紹介するので、皆様の教訓になれば幸いである。

1982 年夏だったっけ、星稜登高会の仲間と 2 人パーティーを組み、剣岳源次郎尾根でクライミングをしていた。I 峰下部中谷ルートに登り、その日のうちに I 峰上部名古屋大ルートも登ってしまうつもりだった。ところが、源次郎尾根主稜線から名古屋大ルートの取付きに至るトラバース点が見えさっぱり分からない。中川がトップで尾根に登るうちにトラバース点を通り過ぎて I 峰頂上が見えてきてしまった。あれ？と自信を失い、下った。T 橋に交代してトラバース点があるはずの地点まで尾根に登り直したが、やはり分からない。中川トップで再度探索したが、ダメ。

日が暮れてきた。好天だし夜も寒くなさそう。おい、ビバークしようぜ、と決め、剣沢キャンプ場の会のベースキャンプとその旨トランシーバ通信。水もないままそのままごろりと横になった。ぶ厚いコケの地面は昼間の熱気を蓄えて暖かい。満天の星をあおいで眠った。思えば、あの頃は若かった。何しろ、前日は、剣沢キャンプ場から八つ峰 VI 峰 D フェース→A フェースルート 2 本→C フェース剣稜会ルート→剣沢キャンプ場と 4 本を日帰りで登ったのだから。このどんくさい中川にも、ほどほどの力が、あの頃にはあったのだ。

さて次の日も暑い暑い好天の夏の日。我々は尾根をたどって源次郎 I 峰ピークに立った。ここから懸垂下降して名古屋大ルートを取付き点まで下り、何としても、名古屋大ルートに登ろうと考えたのだ。さて、行くぜ。40m ロープ 2 本をえいやっと放り投げ、中川先頭で下降を始めた。ところが、ん？？。浮石だらけだ。ルートにそった下降ではなかったのだ。まあ、いいだろう、と浅はかにも、中川はそのまま下降を続行した。事件はその時おきた。頭くらいの大サイズの浮石がはずれ、中川の下方のロープを見事に直撃したのだ。結果を見たくないのに、しばし目をそらし硬直していた。やがてあきらめて凝視した中川の目に、ざっくりえぐられたロープという現実が突き刺さった。T 橋のではなく中川のロープの方だった。その地点まで降りてみると、ロープは直径の 3/4 までえぐられていた。40m ロープ（当時は長さ 40m だった）の端から 25m の箇所である。中川は半泣きでナイフを出し、ロープを切断した。その先はお決まりの「結び目通過の懸垂下降技術」で懸垂を続け、無事、名古屋大ルート取付きに降り立った。後続の T 橋も難なく下降してきた。

名古屋大ルートは、25m でピッチを切って登攀した。ハーケンを打ち足して確保点を作った。我々は、何とか、源次郎尾根 I 峰下部中谷ルート→上部名古屋大ルートの継続登攀に成功した。

みなさまに参考にしていただきたいのは、(1)ルートの記録を読みこむ力をつけて下さい。「主稜線の傾斜がいったん緩くなったヤブを左に突っ切ると取付きへ」が当時の駆け出しの中川には読み込めなかった。自分でルート図とルート記録を書くようになってからは、ずいぶん読めるようになった。(2)初めてのルートにどしどし行きましょう。これぞ、アルパインクライミングの醍醐味です。そうすれば読めるようになるし、書けるようになる。(3)初下降ルートではロープを投げず、必ず、袋に詰めて腰に下げて下降を。初級アルパインリーダー学校ではこれでやっています。

間抜けな経験はまだまだ続く。それらは次の機会に・・・